『仮名文字遣』と『色葉字類抄』
－漢語の出典をめぐって－

高　瀬　正　一

1. はじめに

『仮名文字遣』は近年、今野真二[注1]氏により仮名遣い書というよりも辞書体資料であるとの見解が示され、とりわけ『和名類聚抄』との関連が深いとされている。『仮名文字遣』の編纂過程において『和名類聚抄』が用いられたとすれば、それ以外の辞書との関連も考えられるのではないか。本稿では一例として『色葉字類抄』との関連性を提起したい。『仮名文字遣』と『色葉字類抄』については、すでに遠藤和夫[注2]氏が漢字表記に着目して、『仮名文字遣』の「をこる　矜　奢　驕」に対して、『色葉字類抄』（前田家本）には「傲ヲゴル　奢　侈　慢　驕」とあることを指摘している。同様の例は『仮名文字遣』の「えひす　俘囚　（下略）」と『色葉字類抄』（前田家本）「俘囚　エヒス（下略）」にもみえるとのことである。見出し語だけではなく、漢字表記が複数例一致することから両者は何らかの関連がうかがえそうであるものの、氏の指摘は『下官集』の出典考証の中でのいわば派生的なものである。関連性を検証するため、『仮名文字遣』の全見出し語を『色葉字類抄』の掲出語と比較対照する必要があろう。

『仮名文字遣』の出典についても和語は『源氏物語』を中心とする文学作品などから採られていることが判明している。それに対して、漢語[注3]は50例程度、存在しているとのことであるが、出典については十分には解明されていない。漢語[注4]の「雌黄」が『色葉字類抄』にもみえているとの指摘もあり、『仮名文字遣』には漢語がどの程度登載されているのかを明らかにし、『色葉字類抄』が漢語の出典の一つともなり得るか否かについても合わせて検討を試みる。

2. 見出し語と掲出語

2－1 『仮名文字遣』

⑴　成立が最も古い文明十一年本を用いる。

⑵　見出し語については五十音順に並び替える。

⑶　仮名遣いの相違のみで別見出しとなっているものは、漢字表記を参考にして一つにまとめる。

例　「あまえて　甘　辛」「あまへて　甘　辛」は「あまえて」を代表とする。

⑷　同一の語が部門の関係などで複数あるものは一つにまとめる。

(2)

例 「いぬゐ　乾」は「い部」「ゐ部」に登載されているが、「いぬゐ」を代表とする。

(5) 活用形の相違のみで別見出しとなっているものは、漢字表記を参考にして一つにまとめる。

例 「いふ　言　」「いへり　云」は「いふ　言」を代表とする。

(6) 明らかな誤りとおもわれるものは慶長版本に基づき改める。

例 「あなうち　蹔」（文明十一年本）を「あなうら　蹔」（慶長版本）とする。

2－2 『色葉字類抄』

(1) 前田本は完本ではないため、全体の比較が可能な黒川本を用いる。

(2) 掲出語については誤写を改めたものに拠る。

2－3 一致度

『色葉字類抄』との比較において見出し語の共通性のみで一致度を判定する。見出し語が共通していれば、漢字表記の一部の相違があっても一致したものと判定する。

例 『仮名文字遣』には「あんをん　穏」、『色葉字類抄』には「安穏　アンオン」とあり、見出し語は一致しているが、漢字表記は完全には一致していない。

3. 見出し語の共通性

『仮名文字遣』の見出し語を行ごとにまとめたものが表1である。見出し語は最多がア行の304例、最少がラ行の12例である。ア行が最多であるのは定家仮名遣いの主目的であるオとヲの書き分けに関わる語が多数あることからであり、ラ行の少なさは和語では語頭にラ行音が立たないためであろう。見出し語、1020例に対し『色葉字類抄』には618例が登載されており一致率は62%で、約6割が共通している。半数以上が『色葉字類抄』と共通していることから何らかの関連はうかがえそうであるが、共通性といっても見出し語という語彙からの観点であり、漢字表記からの検討もなお必要である。厳密にいえば、618例の見出し語全体を通し漢字表記をふまえた分析を行うべきであろう。また、『節用集』など同時代の他の古辞書との関連も考慮する必要があろうが、現時点で両者の強い関連性を示唆する例を次に示す。

表1 『色葉字類抄』との共通性

行	語彙数	登載あり	一致率(%)
あ	304	182	60
か	135	74	55
さ	101	61	60

た	94	57	61
な	38	27	71
は	65	35	54
ま	84	55	65
や	34	19	59
ら	12	8	67
わ	153	100	65
計	1020	618	62

4.『色葉字類抄』からの可能性が高い例

『仮名文字遣』の漢字表記は「をもし　錘」、「をもし　重」のように語義の確定のためになされたものであろうが、実例に即してみると漢字との結びつきが希薄であり、『色葉字類抄』から採られた可能性が高いものがある。

『仮名文字遣』の「したかひて」には「随　肩　従　遵　行」と5例みられる。『色葉字類抄』には「随」を筆頭に「随　スイ　シタカフ　肩―　　従　　―車―者―類等也　遵　シユン　－行也（中略）順（下略）」（下シ辞字）とあり、合計52例の「シタカフ」の訓を持つ漢字が列挙されている。そのなかには「従　遵」は含まれているものの「肩行」は存在しない。「随」や「遵」の注記には「肩―」「―行」とあり「肩随」「遵行」として用いられることを示している。慶長版本、無刊記本では「随　肩　従　順　事　遵　行」（7例）と「順」「事」がふえている。天正六年本では「随　肩　従　遵　行　事」（6例）で「事」がふえている。「順」は掲出字中にみられるが、「事」は52例中にはみえていない。訓との結びつきが異質な「肩」「行」は『色葉字類抄』から、「したかひて」に対する漢字を抽出する際に注記を本文と誤解し混入したと考えれば辻褄が合う。ちなみに、『色葉字類抄』には「肩」には「ケン　カタ」（上カ人体）、「行」には「ヲコナフ」（上ヲ辞字）、「事」には「コト」とあり、いずれも「シタカフ」の訓はみえない。「事」は『色葉字類抄』以外からであろう。

注記が本文に混入したと思われる他の例をあげる。『仮名文字遣』の「きはまる」には「遽　政　要　礙　窮　究　谷　進退惟也」とあり、11例あげられている。慶長版本、無刊記本では「極　窮　鞫　究　遽　」の5例、天正6年本では「遽　礙　窮　鞫　究　谷」の6例である。文明十一本の「進退惟也」は他の諸本にはみられない。他の本文を比較対照すれば実際は「遽」から「谷」までの7例となる。『色葉字類抄』では「キハム　キハマル」に「極　キハム　キハマル　究　窮　竟　谷　（中略）鞫（下略）」（下キ辞字）とあり、「極」を代表掲出字として33例が登載されており、そのなかには「窮　究　谷　鞫」も含まれている。特筆すべきは「谷」の注記に「谷　進退―惟」とあるこ

とである。「したかひて」と同じく注記を本文と誤解し取り込んだものと考えられる。「遽」は「ヲソル」（中オ人事）、「政」は「マツリコト」（中マ雑物）、「要」は「モトム」（下モ辞字）、「礙」は「サマタク」（下サ辞字）とそれぞれあって、いずれも「キハマル」とは隔たりがあり、先の「事」と同じく『色葉字類抄』以外からであろう。

5. 漢語

『仮名文字遣』より漢語を抽出するが、漢語の範囲は狭義の漢語だけではなく混種語や漢語起源の語なども含む広義の漢語とする。『仮名文字遣』は見出し語を設定した際と同じ方法とする。『色葉字類抄』も掲出語を設定した際と同じ方法をとるが、漢字表記が黒川本になく前田本にはない場合は、前田本からとする。両者の関係を対照して示したものが表2である。見出し語だけではなく、漢字表記の一致度も考慮する。『色葉字類抄』に対応のないものは「—」、類似しているものは「＊」とした。

『仮名文字遣』には124例の漢語がみられ、そのうち54例が見出し語、漢字表記の両者とも『色葉字類抄』と一致するもので、全体の44%を占める。54例が『色葉字類抄』からの可能性のあるものである。見出し語の一致率が60%であったのに対して44%と漢語の方が低く、漢語の出典が多岐にわたることを示している。『仮名文字遣』には100例以上の漢語が登載されており、和語だけではなく漢語の仮名遣いも重要視されていたことが分かる。以下、問題のある語に関して解説を加える。

表2『仮名文字遣』と『色葉字類抄』の漢語

『仮名文字遣』				『色葉字類抄』		
	見出し語	所属部	漢字表記	漢語	所属部門	漢字表記
1	あんをん	を	安穏	アンオン	下ア畳字	安穏
2	いうしよく	い	有識	イウシヨク	上イ畳字	＊有職
			右族	−		
3	えい	え・い	纓	エイ	下エ雑物	纓
4	えう	え	葉	エフ	上ハ植物	葉（前田本）
5	えつさい	え・い	雀鰓	エツサイ	下エ動物	雀鰓
6	えほし	え	烏帽子	＊エホウシ	下エ雑物	烏帽子
7	えんとう	え	園豆	エントウ	下エ植物	園豆
8	えんのうばそく	え	役優婆塞	−		
9	えんぶだい	え	閻浮提	−		
10	おほとねりれう	ほ	大舎人寮	＊オホトネリ	中オ官職	＊大舎寮
11	おんさうし	う	御曹子	−		

12	おんしやく	お	温石	−		
13	おんてうど	お	御調度	＊テウト	下チ雑物・下チ畳字	＊調度
14	おんはかし	お	御博士	＊ハカセ	上ハ官職	＊博士
15	かいさう	い	海藻	＊サウ	上ニ植物	海藻
16	かえう	え	荷葉	−		
17	かかい	い	加階	カヽイ	上カ畳字	加階
18	かれうひんか	う	迦陵頻伽	＊カレウヒン	上カ人事	＊迦陵頻
19	きうえう	え	九曜星	−		
20	きやうかい	い	境界	−		
21	くはんさう	う	萱草	クワンサウ	中ク植物	萱草
22	くはんたい	い	緩怠	クワンタイ	中ク畳字	緩怠
23	くゑんそく	ゑ	眷属	＊クワンソク	中・ク畳字	眷属
24	くんえこう	え	薫衣香	−		
25	けいかい	い	荊芥	−		
26	けうたう	う	澆漓	−		
27	けうなり	う	希有	ケウ	中ケ畳字	希有
28	けしう	う	下衆	−		
29	こうはい	い・う	紅梅	コウハイ	下コ植物	紅梅
30	こえうまつ	え	五葉松	＊コエウノマツ	下コ植物	五葉松
31	こえん	え	後宴	＊コウエン	下コ畳字	後宴
32	こくすいのえん	い	曲水	＊コクスイ	上コ天象・下ハ畳字	曲水
33	御けいのきやうかう	い	御禊行幸	＊コケイ	下コ畳字	＊御禊
34	御せい	い	御製	コセイ	下コ畳字	御製
35	こちやうけんすい	い	呉丁間水	−		
36	さい	い	犀	サイ	下サ動物	犀
37	さい	い	菜	−		
38	さい	い	賽	−		
39	さい	い	才	サイ	下サ人事	才
40	さいし	い	妻子	−		
41	さいなん	い	災難	サイナン	下サ畳字	災難
42	さいのつの	い	奴角	＊サイノハナツノ	下サ動物	奴角
43	さう人	う	相人	＊サウ	下サ人事	＊相
44	さうり	う	草履	サウリ	下サ雑物	草履
45	さえ	え	伎	−		
46	しうねし	う	強	−		

47	しやうこ	う	鉦鼓	シヤウコ	下シ雑物	鉦鼓
48	しやうのふゑ	え	笙	シヤウノフエ	下シ雑物	笙
49	しわう	う	雌黄	シワウ	下シ光彩	雌黄
50	しをん	を	紫苑	シヲン	中ノ植物・下シ植物	紫苑
51	しんさう	う	心操	シンサウ	下シ畳字	心操
52	しんわう	わ	親王	－		
53	すいえき	え	水驛	スイエキ	下ス畳字	水驛
54	すいかん	い	水旱	－		
55	すいさう	い	瑞相	－		
56	すいしやう	い	水精	スイシヤウ	下ス雑物・下ミ雑物	水精
57	すいしやく	い	垂迹	－		
58	すいしん	い	随身	スイシン	下ス官職	随身
59	すはう	う	蘇芳	スハウ	下ス植物・下ス光彩	＊蘇枋
60	せい	い	性	セイ	下セ人事	性
61	せいへう	う	聖廟	－		
62	せうそく	う	消息	セウソク	下セ畳字	消息
63	せきれい	い	鶺鴒	セキレイ	上ニ動物・上ト動物	鶺鴒
64	そうして	う	惣	－		－
65	そくひ	ひ	續飯	＊ソクイヒ	中ソ雑物	續飯
66	たい	い	題	タイ	中タ雑物	題
67	たいかん	い	對捍	タイカン	中タ畳字	對捍
68	たいくわん	い	代官	－		
69	たいてん	い	退轉	－		
70	たいのや	い	對屋	－		
71	たんたい	い	探題	－		
72	てい	い	躰	テイ	中タ人体・下テ人体	＊體
73	てい	い	泥	テイ	下コ地儀・下テ地儀	泥
74	ていわう	い	帝王	－		
75	てう	う	帖	テウ	下テ員数	帖
			疊	テウ	中タ雑物	疊
76	てうし	う	銚子	テウシ	下テ雑物	銚子
77	てんかい	い	天蓋	－		－
78	てんしやう	う	天井	テンシヤウ	下チ地儀	天井
79	とうかう	う	冬瓜	＊トウ	上カ植物	冬瓜
80	とりゐしやうし	ゐ	通居障子	＊シヤウシ	下シ地儀	＊障子

81	ないけうはう	い	内教坊	－		
82	ないしのかみ	い	尚侍	ナイシノカミ	中ナ官職	尚侍
83	なんこう	う	難功	－		
84	ねうはち	う	鐃鉢	＊ネウ	中ネ雑物	＊鐃
85	はせをは	を	芭蕉葉	ハセウハ	上ハ植物	＊芭蕉
86	ひはのさう	う	琵琶槽	＊サウ	中ウ雑物・下サ雑物	＊槽
87	ふせんれう	う	浮線稜	－		
88	ふたうなり	う	不當	フタウ	中フ疊字	不當
89	ふね一そう	う	舟一艘	＊ソウ	中ソ員数	＊艘
90	ふゐ	ゐ	無為	フヰ	中フ疊字	無為
91	へい	い	屏	ヘイ	上ヘ地儀	屏
92	へうゑい	う	苗裔	ヘウエイ	上ヘ畳字・下ヒ雑物	苗裔
93	へうゐん	う・ゐ	苗胤	－		
94	ほいろ	い	焙爐	－		
95	ほうもん	う	法文	ホフモン	上ホ畳字	法文
96	まいゑ	ゑ	玫瑰	＊マユヱ	中マ雑物	玫瑰
97	やうし	う	楊枝	ヤウシ	中ヤ雑物	楊枝
98	ようとう	う	用途	＊ヨウト	上ヨ畳字	用途
99	らいし	い	櫑子	ライシ	中ラ雑物	櫑子
			礼紙	ライシ	中ラ雑物	礼紙
100	らいたう	い	礼堂	ライタウ	中ラ地儀	礼堂
101	らいはん	い	礼盤	ライハン	中ラ畳字	礼盤
102	らうそく	う	蠟燭	ラフソク	中ラ雑物	蠟燭
103	らうろう	う	牢籠	ラウロウ	中ラ畳字	牢籠
104	らうゑい	い	朗詠	ラウエイ	中ラ畳字	朗詠
105	らくたい	い	落帯	－		
106	りやうほう	う	令法	－		
107	れいしゆ	い	醴酒	＊レイ	中レ飲食	＊醴
108	れいしん	い	伶人	レイシン	中レ人倫	伶人
109	れうし	う	獵師	レウシ	中レ人倫	獵師
110	れうわう	う	陵王	リヨウワウ	上リ人事	陵王
111	ゐさい	ゐ	委細	ヰサイ	中ヰ畳字	委細
112	ゐしゆ	ゐ	委趣	－		
113	ゐねう	ゐ	圍遶	ヰネウ	中ヰ畳字	＊圍繞
114	ゐのふ	ゐ	膽	＊イ	上イ人体	膽

115	ゐん	ゐ	印	キン	上イ雑物	印
			院	キン	中キ地儀	院
			韻	キン	中キ辞字	韻
116	ゑ	ゑ	繪	エ	下エ雑物	繪
			畫		下エ雑物	畫
117	ゑいくわの物語	い	栄花物語	＊エイクハ	下エ雑字	＊榮華
118	ゑいする	い	詠	エイス	下エ人事	詠
119	ゑいよう	ゑ・い	栄耀	エイエウ	下エ畳字	栄耀
120	ゑうち	ゑ	幼稚	エウチ	下エ畳字	幼稚
121	ゑしのたくひ	ゑ	衛士焼火	＊エシ	下エ官職	＊衛士
122	ゑしやく	ゑ	會尺	エシヤク	下エ畳字	＊會釋
123	をんしゆつ	を	恩恤	－		
124	をんたく	を	恩澤	－		

5－1 『色葉字類抄』の注記において一致が見られる例

「したかひて」「きはまる」は注記を誤認し漢字表記に取り込んだ例であるが、漢語においても同様な例があげられる。一致例に準ずるものともいえるものである。

43「さう人　相人」

天正六年本が「さう人」、慶長版本、無刊記本が「さうにん」と異同がみられるが、漢字表記は「相人」で共通している。『色葉字類抄』には「相　サウ　－人（中略）文字之－也」（下サ人事）と「相」単独である。注記に「－人」とあることより「相人」が導かれる。

59「すはう　　蕪芳」

見出し語に関しては異同がみられない。漢字表記については、文明十一年本、天正六年本が「蕪芳」、慶長版本、無刊記本が「蘇枋」とある。『色葉字類抄』には「蘇枋　スハウ芳イ本」（下ス植物）とあり、「枋」を「芳」とする本文もあることを示している。なお、字体にさほど差異のない「蕪」と「蘇」の違いは考慮しない。もう一箇所は「蘇枋　ソハウ　スハウ俗芳イ本」（下ス光彩）とあり、「ソハウ」の読みも示すが、注記は同じである。『色葉字類抄』の他系統の本文には、『仮名文字遣』と一致する用字をもつものがあることが分かる。また、慶長版本、無刊記本は『色葉字類抄』からとも考えられるが、断定はできない。

72「てい　躰」

漢字表記が文明十一年本、天正六年本が「躰」のみ、慶長版本、無刊記本が「躰　體」とある。見出し語は「てい」で異同はない。『色葉字類抄』には「體　テイ　タイ　又乍躰」（中タ人体）、「體　テイ　　又乍躰」（下テ人体）とある。掲出字こそ相違してい

るが、注記には『仮名文字遣』と一致する字体がみえている。

84「ねうはち　鐃鉢」

文明十一年本のみが「鐃鉢」で、天正六年本、慶長版本、無刊記本が「鐃鈸」と違いがあるが、見出し語は「ねうはち」で異同はない。『色葉字類抄』には「鐃　ネウ　―鉢」（中ネ雑物）とみえており、注記から「鐃鉢」も可能である。

108「れいしゆ　醴酒」

四本とも見出し語、漢字表記ともに異同はない。『色葉字類抄』には「醴　レイ又コサケ　－酒（以下略」（中レ飲食）とある。注記を含めれば『仮名文字遣』と一致している。

114「ゐねう　圍遶」

文明十一年本、慶長版本、無刊記本には「圍遶」、天正六年本のみ「囲繞」とある。見出し語は「ゐねう」で共通している。『色葉字類抄』には「圍繞　ヰネウ遶イ本（以下略）」（中ヰ畳字）とある。諸本のなかでは天正六年本が『色葉字類抄』と一致していることが分かる。「すはう　　蕪芳」と同じく『色葉字類抄』には「圍遶」とある本文をもつものがあることを示しており、注記まで含めれば『仮名文字遣』と一致がみられる。

5－2　見出し語に複数の語が対応する例

漢語は見出し語一語に対して漢字表記も一語で、一対一の対応が原則であるが、なかには複数のものもある。

2「いうしよく　右族　有識」

見出し語は他の三本とも同一である。漢字表記は文明十一年本には「右族　有識」とあり、慶長版本、天正六年本、無刊記本の三本はすべて「右族　有職」である。「有識」とあるのは文明十一年本のみである。『色葉字類抄』には「有職」（上イ畳字）とあり、「右族」はなく『色葉字類抄』からの可能性は低い。

75「てう　帖　畳」

慶長版本、天正六年本、刊無記本も同様で異同はない。『色葉字類抄』には「帖　テウ　紙畳員数也」（下テ員数）、「畳　テウ　タタミ　タタム」（中タ雑物）とあり、両者とも記載されているものの別々の部門である。編纂する際に一つの見出し語としたものであろうか。

100「らいし　櫑子　礼紙」

慶長版本、天正六年本、刊無記本では「櫑子」と「礼紙」は別々に掲げられており、文明十一年本のみが同一の見出し語である。『色葉字類抄』は、「櫑子　ライシ（中略）　礼紙　ライシ（下略）」（中ラ雑物）と同一の部門であり、なおかつ上下に連続しており接近した箇所に両語は登載されていることからも『色葉字類抄』からの可能性が他の語に比べ高いと思われる。

116「ゐん　印　院　員」

「ゐん」の見出し語があるのは文明十一年本のみで他の三本は語そのものが存在しない。『色葉字類抄』にも「印　イン」（上イ雑物）、「院　ヰン　（下略）」（上ヰ地儀）、「韻　ヰン　（下略）」（中ヰ地儀）とみえている。編纂過程において同音語を一つにまとまたものであろうか。

117「ゑ　繪　畫」

文明十一年本、慶長版本、無刊記本は見出し語、漢字表記とも異同がない。慶長版本、刊無記本には「畫」に「ヱカク」の付訓がある。天正六年本は見出し語こそ「ゑ」であるが、漢字表記は「繪　畫　映」と一字増えている。『色葉字類抄』でも「繪　ヱ（中略）畫　同（下略）」（下ヱ雑物）とある。掲出語は「繪」であるが「畫」も同一の箇所に見られるため、『色葉字類抄』からの可能性は高い。

5－3　漢字表記は一致しているが字音の一部に相違がみられる例

15「かいさう　海藻」

「かいさう」は文明十一年本のみで、他の三本には記載自体がない。『色葉字類抄』には「海藻　サウ　ニキメ　　和布　同俗用之」（上ニ植物）とある。「かいさう」ではなく「サウ」と掲出語の一部の字音と和訓を示している。「海藻」も『色葉字類抄』には「稚海藻　チカイサウ」（上チ植物）とあり、「かいさう」単独ではない形で存在している。「チカイサウ」は慶長版本「稚海藻」、無刊記本「稚海藻　海草也」、天正六年本「稚　海草也」とある。慶長版本と無刊記本に「稚海藻」が見えることから両者の関連性はうかがえそうである。

79「とうかう　冬瓜」

他の三本とも同一の記載であり異同はない。『色葉字類抄』には「冬トウ　瓜カモウリ」（上ト植物）とあって、一部の字音と和訓が見られる。「冬瓜」の字面から期待される字音は「トウクワ」であろう。「アヲウリ」は「青瓜　セイクワ　アヲウリ」（下ア植物）、「ウリ」も「瓜　クワ　ウリ」（中ウ植物）とある。「冬瓜」は一般的には音読みの「トウクワ」であり、「とうかう」は他に分布の見られない特殊な語形である。『色葉字類抄』からと仮定すれば、「トウクワ」の誤写の可能性も捨てきれない。

97「まいゑ　玫瑰」

見出し語には異同がないが、漢字表記中の注記に差異がみられる。文明十一年本は「玫瑰」で注記はない。天正六年本は「玫瑰　七宝中也」、慶長版本、無刊記本は「玫瑰七寶之中也」とあり、三本には「七宝」の一つであるという共通した注記がみられる。『色葉字類抄』には「玫瑰　ハイクワイ　マユヱ　与雲母同」（中マ雑物）とある。「マユヱ」であり「まいゑ」とは小異がある。「まいゑ」とは「玫」と「瑰」の呉音読みであり、「まいくわい」ともよばれ、「中国でとれる美石の名。雲母などの類」の意である。[注5]『色葉字類抄』からとも考えられるが、他の辞書との関連も考え合わせねばなるまい。

5－4 『仮名文字遣』の見出し語や漢字表記などを変更した例

27「けうなり　奇有也」

「けうなり」は元々「奇布也」であるが、「けう」に「奇布」では不適切である。他の三本にはすべて「希有」とあり、「奇布」は文明十一年本のみの独自の用字である。『色葉字類抄』にも「希有　ケウ　非常分」とあり、他の三本と一致している。「奇布」は「希有」の誤写とみて「希有」に改めた。

28「けしう　下衆」

「けしう」には「下習」があてられている。「下習」は『日本国語大辞典　第二版』などの大部の辞書類にも記載がない特殊な語である。慶長版本、無刊記本、文明十一年本は「下習」であるが、天正六年本のみが「下衆」とある。「下衆」は一般的には直音化した「けす」で定着しており、「けしう」はそれを拗音で読んだ語形の可能性がある。文学作品には「けす」の形で『源氏物語』や『枕草子』に分布しており平安時代からみられる。「けす」に「下衆」を当てる例としては『今昔物語集』がある。ちなみに、『色葉字類抄』には「けす」は存在しない。「下習」は「下衆」の誤写とみて改めたが、なお検討が必要であろう。

87「ひはのさう　琵琶槽」

元々は「ひはのこう」とあった。漢字表記は「琵琶槽」で一致がみられない。見出し語から期待される漢字表記は「琵琶甲」であろう。「琵琶甲」は「槫」の意であり、『太平記』に用例がみえている。他の三本とも見出し語は「ひはのこう」、漢字表記は「琵琶槽」であり異同はみられない。漢字表記を尊重すれば「ひはのさう」となろう。「槽」は「弦[注6]楽器の部分名。（中略）琵琶では胴の背面の胴の背面の板をいい、（中略）俗に甲とも」とあり『源平盛衰記』に用例がみえている。「槽」を俗に「甲」ということから「ひはのこう」も誤記と断定できないが、漢字表記の面から「ひはのさう」に改めた。『色葉字類抄』には「槽　サウ　ウマフネ」（中ウ雑物）、「槽　サウ　サカフネ　酒」（下サ雑物）とみえている。なお、「ひは」も琵琶　ヒハ　馬上ハシヤウ　樂器也」（下ヒ雑物）とある。「琵琶　ヒハ」と「槽　サウ」から「琵琶槽」を導ける。

5－5　見出し語は一致しているが漢字の字体に相違がみられる例

123「ゑしやく　會尺」

見出し語、漢字表記は他の三本とも異同はないが、天正六年本のみ「アイシライ」の傍訓がある。『色葉字類抄』には「會釋」　エシヤク（下略）」（下ヱ畳字）とある。「尺」と「釋」で字体の相違がみられる。「尺」を略体の「釈」としたものの省画とみなせば『色葉字類抄』からの可能性もあろう。

5－6 『仮名文字遣』の短縮語形を誤写と仮定すれば『色葉字類抄』からの可能性が高い例

6「えほし　烏帽子」

漢字表記は他の三本とも異同はない。見出し語については、文明十一年本のみが「えほし」とするが、他の三本は「ゑほし」も掲げており、仮名遣いにゆれがある。『色葉字類抄』には「烏帽　ヲホ　子ヱホウシ（以下略」（下エ雑物）とあり、語形は一致がみられない。「えほし」と「えほうし」は「えほうし」が元々の語形である。「えほし」が「えほうし」の誤写とすれば、『色葉字類抄』からの可能性がある。

30「こえうまつ　五葉松」

見出し語は文明十一年本のみが「こえうまつ」で他の慶長版本、天正六年本、無刊記本が「こえうのまつ」で「の」が付加されている。漢字表記も文明十一年本のみが「五葉松」で慶長版本、天正六年本、無刊記本の三本が「五葉」で「松」が欠けている。『色葉字類抄』では「五粒松　コエウノマツ　五葉松　同」（下エ植物）とある。文明十一年本の漢字表記は『色葉字類抄』と共通しており、「こえうまつ」を誤写とすれば『色葉字類抄』からとすべきかもしれない。

31「こえん　後宴」

見出し語、漢字表記は他の三本とも異同はない。『色葉字類抄』には「後宴　コウエン」（下コ畳字）とある。文学作品には後を呉音読みした「こえん」の形で『源氏物語』に用例があるが、「こうえん」はみられない。「こうえん」は漢音読みしたものである。「こえん」を「コウエン」の誤写とすれば『色葉字類抄』からの可能性もある。

42「さいのつの　奴角」

見出し語、漢字表記は他の三本とも異同はない。『色葉字類抄』には「奴ド角　サイノハナツノ　犀鼻上角」（下サ動物）とあり、『仮名文字遣』よりも短い語形である。「さいのつの」を「サイノハナツノ」の誤写とすれば『色葉字類抄』からとも考えられる。

65「そくひ　續飯」

見出し語は文明十一年本のみが「そくひ」で他の慶長版本、天正六年本、無刊記本が「そくいひ」である。「そくひ」も慶長版本に「そくひとも」とあるように他の三本にも併記されている。『色葉字類抄』には「續飯　ソクイヒ」（中ソ雑物）とあり、文明十一年本以外の三本と一致がみられ関連がうかがえる。「そくひ」と「そくいひ」では「そくいひ」の方が元来の形である。「そくひ」を「そくいひ」の誤写と考え、すべて『色葉字類抄』からとするか、慶長版本、天正六年本、無刊記本が『色葉字類抄』、文明十一年本がそれ以外とする二つの可能性がある。誤写とみなさなければ文明十一年本は『色葉字類抄』以外からであろう。

6. おわりに

『仮名文字遣』と『色葉字類抄』の関連性を見出し語の共通性と漢語という二つの視点から検討してきた。見出し語では約六割と半数以上の共通性がみられたが、この割合は高いといえるのかについては、なお他の辞書類、とりわけ『節用集』との比較を俟つ必要があり、今は事実の指摘にとどめる。半面、『色葉字類抄』と六割もの共通性があることは辞書体資料であることを裏づけているともいえる。また、『色葉字類抄』との関連性を確実にするためには、漢字表記との関係も検討事項である。

『仮名文字遣』には見出し語の約一割に当たる 100 例以上の漢語が登載されていることを明らかにしたが、『色葉字類抄』との共通性は約四割で、見出し語よりは低く、漢語の出典が多岐にわたっていることを示している。共通性のある漢語が『色葉字類抄』からかとは即断できず、見出し語と同様、他の辞書類との比較対照を俟って結論付けなければならない。

漢語で出典の判断が難しいのは、文学作品にもみえる例である。例えば、「さう人（相人）」は『源氏物語』にも用例がみえている。注釈書を含む『源氏物語』からとするか、『色葉字類抄』からとするか迷うところである。『色葉字類抄』を文学作品にみえる和語を中心とした語に漢字を当て、語義を確定するために利用されたと仮定すれば、第一段階が文学作品、第二段階が『色葉字類抄』という流れが想定できるのではないだろうか。文学作品にみえない漢語ならば色葉字類抄から直接採られた可能性もあろう。

【使用資料】

『假名文字遣』＜文明十一年本・慶長版本＞（汲古書院・1980 年）
『仮名文字遣』＜天正六年本・無刊期本＞（大空社・1996 年）
『色葉字類抄　研究並びに總合索引　黒川本影印篇』（風間書房・1987 年）
『色葉字類抄　研究並びに總合索引　索引篇』（風間書房・1987 年）

【注】

注 1　今野真二『仮名遣書論攷』（和泉書院・2016 年）10 頁及び 38 頁
注 2　遠藤和夫『定家仮名遣の研究』（笠間書院・2012 年）321 頁及び 332 頁
注 3　注 1 同書　49 頁～ 50 頁
注 4　注 1 同書　51 頁
注 5　『日本国語大辞典（第二版）』＜第 12 巻＞（小学館・2001 年）291 頁
注 6　『日本国語大辞典（第二版）』＜第 8 巻＞（小学館・2001 年）205 頁

【参考文献】

築島裕『歴史的仮名遣い』（中央公論社・1986 年）

馬渕和夫・出雲朝子『国語学史』（笠間書院・1999 年）
宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安倍清哉『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院・2014 年）
藤本灯『『色葉字類抄』の研究』（勉誠出版・2016 年）

（たかせ　しょういち）